孔雀

芥川龍之介

これは異本「伊曾保の物語」の一章である。この本はまだ誰も知らない。

「或鴉おのれが人物を驕慢し、孔雀の羽根を見つけて此処かしこにまとひ、爾余の諸鳥をば大きに卑しめ、わが上はあるまじいと飛び廻れば、諸鳥安からず思ひ、『なんぢはまことの孔雀でもないに、なぜにわれらをおとしめるぞ』と、取りまはいてさんざんに打擲したれば、羽根は抜かれ脚は折られ、なよなよとなつて息が絶えた。

「その後またまことの孔雀が来たに、諸鳥はこれも鴉ぢやと思うたれば、やはり打ちつ蹴つして殺してしま

うた。して諸鳥の云うたことは、『まことの孔雀にめぐり遇(あ)うたなら、如何(いか)やうな礼儀をも尽さうずるものを。さてもさても世の中には偽(に)せ孔雀ばかり多いことぢや。』

「下心(したごころ)。——天下(てんか)の諸人(しよにん)は阿呆(あはう)ばかりぢや。才(さえ)も不才(ふさえ)もわかることではござらぬ。」

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。